

小学生および中学生のスポーツ活動による心理社会的効果と その日常生活への般化の実態

Analysis on the psychosocial effects of sports activities and their generalization to the daily lives of pupils and junior high school students

佐々木 万 丈¹⁾ 西 田 保²⁾ 北 村 勝 朗³⁾
磯 貝 浩 久⁴⁾ 渋 倉 崇 行⁵⁾

*Banjou SASAKI, Tamotsu NISHIDA, Katsurou KITAMURA,
Hirohisa ISOGAI, Takayuki SHIBUKURA*

Abstract

The purpose of this study was to classify the psychosocial skills improved by sports activities in junior sports clubs and in junior high school athletic clubs and to reveal the process of the generalization of those skills to the life skills in pupils and junior high school students.

The students ($N=173$, ages 11-14), their parents ($N=169$) and coaches ($N=17$) were asked to complete the questionnaires about what psychosocial skills were acquired through sports activities in junior sports clubs and junior high school athletic clubs, what enabled the students to develop the psychosocial skills in their club activities, whether the skills were practically useful in their daily lives or not, how the generalized skills benefited them in daily situations other than sports activities, and what advanced and affected the generalization of psychosocial skills. The type of psychosocial skills and the factors which enhanced the generalization of those skills were analyzed using the KJ method. The following results were obtained: 1) The students, their parents, and coaches commonly recognized that the psychosocial skills gained from sports activities were effective in developing the good relationship with others, doing things patiently, and solving various problems. 2) It was pointed out by the most participants in this research that those skills were actually useful in their daily lives. 3) It was suggested that the generalized psychosocial skills contributed to the improvement of the students' quality of life. 4) The factors which promoted the generalization of the psychosocial skills were as follows: making practical use of them in everyday situations, getting some successful experiences and positive emotions resulting from using the skills, having some significant role-models who can use the skills effectively, and recognizing the value of the psychosocial skills.

Keywords: psychosocial skills, life skills, open-ended questionnaires

I. 問 題

小学生と中学生が組織的にスポーツ活動を行う場として、スポーツ少年団（以後、スポ少と表記）と学校運動部（以後、運動部と表記）があげられる。現在、スポ少では86万5千人の小学生以上の子ども¹⁹⁾が、

また、中学校運動部では全国中学生の約65%にあたる234万人の生徒⁷⁾がスポーツ活動に取り組んでいる。

このような場でスポーツに取り組むことの意義には、体力や運動能力の発達だけでなく、社会性の成長や促進が含まれることが指摘されている^{5) 16)}。このことは、スポーツ活動に取り組む児童生徒の社会性に関する自己評価が、スポーツ活動を行わない児童生徒よりも高い^{8) 12) 13)} ことなどからも示唆される。しかし、現実には、競技志向の強いクラブ活動に取り組む児童は感情的で自己中心的な側面がみられる¹⁸⁾ ことや、他者への思いやりに欠ける行動をとる¹⁰⁾ ことなども報告

1) 日本女子体育大学（教授）

2) 名古屋大学総合保健体育科学センター（教授）

3) 東北大学大学院教育情報学研究部（教授）

4) 九州工業大学情報工学研究院（准教授）

5) 新潟県立大学人間生活学部（講師）

されている。このような現実を踏まえると、スポーツ活動による社会性の成長や促進はどのような過程を経るのか、またその過程に含まれたり影響を与えたりする要因は何かなどが明らかにされる必要がある。

心理学には、このような過程を考えるときの理論的枠組みの一つに「般化」がある。般化とは「ある刺激に条件づけられた反応が、他の類似の刺激に対しても生じること」⁹⁾であり、子どもの社会性の成長に当てはめれば、「部活動を通じて元気にあいさつすることを身に付けた子どもが、日常生活でも地域の人々と自然にあいさつができるようになった」などの例が考えられる。近年では、このようなスポーツ活動に関わる心理社会的な能力の般化に関連する問題が、心理社会的スキルやライフスキルをキーワードに検討されてきている。例えば、高校生対象の研究¹⁵⁾では、運動部活動参加者は一般生徒と比較してライフスキル得点が高く、その得点が高い生徒は部活動場面における競技状況に関わる心理社会的スキルの得点も高いことが示された。さらに、競技場面の心理社会的スキルの高さには、指導者による対人スキルの価値に関する指導が影響していることも指摘された。また、大学生が大学体育授業中にスポーツを実施することで経験する自己開示や他者協力、さらにはできないことができるようになったなどの挑戦や達成の経験と、日常生活場面のライフスキルとの関係性を検討した研究¹⁴⁾では、自己開示経験は男女共にライフスキルとしての「他者と相談できる」ことや「リーダーシップをとる」ことなどに弱いながらも肯定的に影響することが示された。これらの知見をふまえると、スポーツ活動中の様々な経験に含まれる心理社会的なスキルの経験は、類似の内容を持つライフスキルの獲得に結びつく可能性があると思われる。

しかし、これまでに行われた研究では、スポーツ活動中の経験内容とそこで実践される心理社会的なスキルの内容が明確に区別されておらず、スポーツ活動中の心理社会的なスキルの実態については明らかにされていない。また、スポーツ活動における心理社会的なスキルが、日常生活場面のライフスキルに般化しているのかどうかについても、その因果の関係や媒介要因などについての実証的検討は行われていない。今後は、両者の関係性をさらに明確にするために、第1にスポーツ活動における心理社会的なスキルの構成概念を明らかにする必要がある。第2に、その心理社会的なスキルはスポーツ活動場面においてどのように形成

されるのか。すなわち、スポーツ活動における様々な経験はスポーツ活動場面の心理社会的なスキルの形成にどのように関係しているのかが明らかにされなければならない。そして、スポーツ活動場面の心理社会的なスキルの実践は日常生活場面の心理社会的なスキル(ライフスキル)の形成にどのように関係しているのか。すなわち第3として、心理社会的なスキルの般化は起きているのか、起きているとすればそれはどのような過程をたどるのが検討されなければならないと考えられる。

本研究では、以上の考察に基づき、スポーツ活動を通じて身に付く心理社会的なスキルとその般化の実態を検討する。具体的には、スポーツ活動によりできるようになった心理社会的なスキルには何があげられるのか(スポーツ活動による心理社会的効果)。そのスキルはどのようにして身に付いたのか(効果の促進要因)。それが身に付くときにはどのようなことが関係していたのか(効果の影響要因)。その効果は日常生活でも役立つのか(般化の実態)。どのように役立つのか(般化による効果)。なぜ役立つようになったのか(般化の促進要因)。そして、それが役立つようになることにはどのようなことが関係していたのか(般化の影響要因)を明らかにする¹¹⁾。データは、自由記述調査によって収集する。

調査対象には、スポーツ活動と心理社会的なスキルの般化に関して、これまでに検討が行われていないスポ少の小学生と運動部に所属する中学生を取り上げる。また、親や指導者の立場から、スポーツ活動を通じて子どもに心理社会的なスキルが身に付いているかどうか、またその般化はみられるのかを明らかにするため、保護者と指導者にも調査を行う。

文部科学省は学校教育に関わる子どもたちの現状として、身に付いた基礎的知識・技能を実生活に活用する力に課題があるとし、その解決のための理念として「生きる力」の育成⁶⁾をあげている。また、その内容には、各教科の知識・技能だけでなく、「問題に積極的に対応し解決する力」や「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心」⁷⁾などの心理社会的な能力が含まれている。高校生や大学生を対象とする先行研究^{12) 13) 14) 15)}において、スポーツ活動が日常生活場面の心理社会的なスキルの向上につながる可能性があることが指摘されていることからすれば、小中学生にも同様のことが期待される。本研究による知見は、子どもにとってのスポーツ活動の意

義を般化の視点から考えるための、また、スポーツ活動の重要性を示すための基礎的な資料になると考えられる。

Ⅱ. 方 法

1. 調査時期および調査対象者

調査は、2010年8月下旬から9月上旬にかけて実施された。

調査対象者として協力が得られた小中学生、保護

者、指導者は表1の通りである。小学生(62名)は全員がスポ少に、中学生(111名)は全員が所属中学校の運動部活動に所属していた。小学生の年齢平均は 10.78 ± 0.77 歳、中学生は 12.99 ± 0.69 歳であった。また、保護者は調査対象となった小中学生の親であり、指導者は、スポ少に関しては協力が得られたコーチであり、中学校に関しては調査対象となった中学生が所属している運動部活動の顧問教諭であった。

調査対象者全員に対して、研究の目的、方法、およびデータと分析結果の取り扱いなどを文書により詳細に説明し、回答への承諾を得た。

表1 調査対象者および人数

区分	児童生徒			保護者			指導者		
	男子	女子	性別不明	男子	女子	性別不明	男子	女子	性別不明
小学校	39	19	4	9	51	4	1	0	0
中学校	61	50	0	14	89	2	7	4	5

注：分析では性別による比較等を行わないことから、性別に関する応答のなかった調査対象者の記述も含めることにした。また、スポ少への登録は「小学生以上」が可能であるが、本研究では自由記述の際の文章作成能力などを考慮し高学年(5, 6年生)の児童を調査対象にした。さらに、中学校に関しては本研究調査の実施が3年生の部活動引退後の時期であったため、部活動に継続して取り組んでいる1, 2年生を対象とすることにした。なお、学年構成は小学校が5年生39名, 6年生20名, 学年未回答3名, 中学校が1年生60名, 2年生51名であった。小学生の学年未回答の記述も分析データとして用いた。

2. 調査内容

フェイスシートの一部(性別、年齢など)を、小中学生用と保護者・指導者用とで区別した以外はすべて共通の質問項目とした(教示文⁽²⁾は対象者に応じて変更)。内容は以下の通りである。①スポーツ活動の心理社会的効果、②効果の促進要因、③効果の影響要因、④般化の有無、⑤般化場面、⑥般化による効果(般化効果)、⑦般化の促進要因、および⑧般化の影響要因。

3. 分析方法

収集された記述データは、まず、スポーツ活動の心理社会的効果(質問①)に関する記述に基づきKJ法⁽⁴⁾を用いて分類された。次に、分類された記述がどのような心理社会的効果を表しているのかを検討し、効果を説明するカテゴリー名を与えた。さらに、効果に分類された記述と対応する効果の促進要因と影響要因(質問②および③)、般化の有無と般化

場面(質問④、質問⑤)、般化の促進要因と影響要因(質問⑤から質問⑧)のそれぞれの内容が整理された。分類・整理は、本論筆者とスポーツ心理学を専攻する大学院生2名の合議に基づき行われた。

Ⅲ. 結 果

1. 調査対象者の属性

小中学生の調査時点におけるそのスポーツ種目の活動継続期間は平均して2.25年であった。また、活動種目は全体で15種目であった。内訳は陸上競技や水泳などの個人種目が全体の54.4%、バスケットボールやサッカーなどの集団種目が43.8%であった(回答なし1.8%)。さらに、活動場所に関しては、学校の部活動が52.1%、学校とは別の団体(スポ少、私設スポーツクラブ、市町村などの公的スポーツ競技団体など)が42.9%、任意の団体が定期的に開催するスポーツ教室などが5%であった。以上により、本研究において調査対象となった小中学生は、全体としてはさまざま

スポーツ活動に取り組んでおり、また、スポ少と運動部の所属数がほぼ同数であることが認められた。

2. 自由記述の分類

全調査対象者から得られた記述総数は2214⁽³⁾であった。内訳は、スポーツ活動の心理社会的効果に関する記述が391、以下、効果促進要因が368、効果影響要因が351、般化場面が326、般化効果が290、般化促進要因が260、般化影響要因が228であった。

表2から表6には、調査対象者ごとに記述内容とカテゴリー名をまとめた。

1) スポーツ活動による心理社会的な効果

小学生では、記述数の多い順に「社会性・協調性」「忍耐力」「自主性・自発性」「礼儀・あいさつ」および「目標設定・計画性」と解釈できる5つのカテゴリーに分類された。一方、中学生では小学生と同一と考えられる5つのカテゴリーに加え、「努力」「向上心」「聴く態度」「主張」と解釈できるカテゴリーが作られた。

次に、保護者では、小中学生の保護者のいずれにおいても、子どもと同様に「忍耐力」「社会性・協調性」「礼儀・あいさつ」および「目標設定・計画性」と解釈できるカテゴリーが生成された。また、これらの他に、小学生の保護者では「自主性・自発性」が、また、中学生の保護者では「思いやり」「努力」「時間管理」「競争心」「観察力・洞察力」と解釈できるカテゴリーが作られた。

最後に、指導者では「社会性・協調性」「礼儀・規律・規範」「達成行動・努力」と解釈できる3つのカテゴリーが考えられた。

2) 効果の促進要因および影響要因

各調査対象者において、心理社会的な効果が身に付くことを促したり、身に付くことに影響を与えたりする要因をそれぞれ分類・整理した。しかし、一部の回答には各要因の内容が同じであったり、両者に共通に当てはめることができたりする回答（例：小学生「忍耐力」の促進要因「コーチの励ましや指導」、影響要因「監督、コーチ、仲間からの声がけ」）がみられた。このことから、調査対象者がこれらを区別して認識できていないことが考えられた。そこで、促進要因と影響要因の双方を含む形で全体をまとめることにした。その結果、収集された記述内容は、「毎日の練習」「仲

間（先輩・後輩）の存在」「仲間との励まし合い」「先生、指導者、コーチの指導」および「チーム内外での人間交流（試合、競争、会話、コミュニケーション）」に集約できると考えられた。

3) 般化の有無および般化場面

般化の有無を尋ねた質問④に対する回答は、図1の通りであった。小学生が全体の中ではやや低い割合（約63%）であったが、中学生、保護者、指導者に関しては7割から8割（指導者は全員）がスポーツ活動で身に付いた心理社会的なスキルは日常生活でも役立っていると回答した。また、それはどのような場面で役立っているのかを尋ねた結果、ほぼ共通に、学校における普段の生活や勉強への取り組み、仲間との付き合い、家庭や地域の人々との付き合い、テスト勉強、兄弟姉妹に対する態度、電話の応対や目上の人との会話の仕方などであった。

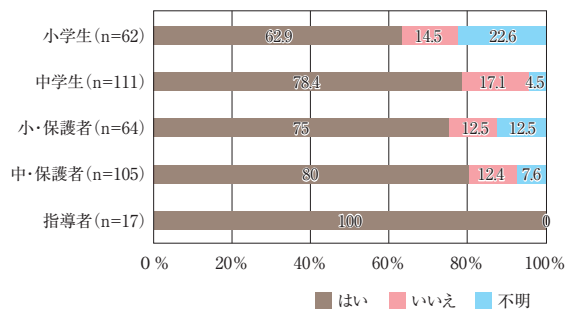


図1 般化の有無

4) 般化による効果

スポーツ活動による心理社会的効果が、日常ではどのように役立っているのかをたずねた結果、各カテゴリーで調査対象者に共通してみられたのは、第1に「社会性・協調性」が身に付いたことで心穏やかな生活を送ることができるようになったこと、あるいは、生き生きとした生活態度がみられるようになったことなどであった。第2は、小中学生自身が「忍耐力」の獲得に関わって集中力や計画力が身についたことを指摘している点であった。その他にも、小中学生共通に「礼儀・あいさつ」が身に付いたことと「対人関係の良好な変化」および「仲間との信頼関係の深化」との関連が、また中学生では「目標設定・計画性」の獲得による「生活のゆとり」との関連などが指摘された。

5) 般化の促進および影響要因

心理社会的な効果の般化促進要因と般化影響要因についても、効果の促進および影響要因の場合と同様に、双方に共通の内容と思われる回答が一部にみられた。しかし、般化の促進および影響要因については、比較的明確な分類が可能であると考えられたため、それぞれについてまとめることにした。

まず、各効果の般化促進要因は、内容がほぼ共通していた。これらをまとめると、第1は身に付いたスキルの「大切さを理解した」という指摘であった。例えば、小中学生は共に「礼儀・あいさつ」において、礼儀の大切さが理解できたことをあげていた。また、中学生は「社会性・協調性」においてコミュニケーションの大切さを、「目標設定・計画性」では生活にリズムを持たせることの大切さを理解したと指摘していた。さらに、指導者においては指摘された3つの効果すべてにおいて、その般化促進要因の中に、集団生活や日常生活を送る上での「重要性や必要性を子どもが自覚した」ことをあげていた。

第2は、各スキルが日常生活場面の問題解決につながったという成功経験であった。例えば、小学生は「社会性・協調性」において、喧嘩の仲裁がうまくいったり、意見をうまくまとめられたりしたということあげていた。また、中学生の保護者は「忍耐力・

根気」において努力が良い結果に結びついた経験を指摘し、さらに、「目標設定・計画性」において目標達成の経験をあげていた。

第3は、肯定的な感情の指摘であった。具体的には「やり遂げたときのうれしさ」(小学生：忍耐力)、「遂行達成の喜び」と「悩みの低減」(小学生：自主性・自発性)、「達成したときの充実感」(中学生：忍耐力)、「限界に挑戦することの楽しさ」(中学生：努力)、「心が通じた時の快感」(小学生保護者：礼儀・あいさつ)などであった。

以上の他、「社会性・協調性」では「リーダーへの昇格」(小学生)、「周囲からの自分に対する声かけの増加」(中学生)、「仲間からの信頼」(小学生保護者)などがそれぞれ指摘されていた。

次に、般化影響要因をみると、般化促進要因と同様に、複数の心理社会的効果に共通する内容が認められた。それは、「周り(仲間、指導者、他チーム)がやっていたので自分も同じようにやってみた」という意味の記述による「監督や仲間の行動」、「仲間の行動」あるいは、「他チームの行動」であった。この他、それぞれのスキル実践に関わる達成や成功の経験、スキルを実践し導かれた結果をほめられたこと、さらにはそのスキルを適切に使えるように自分自身が強い意志を持つようになったことなども指摘されていた。

表2 スポーツ活動による心理社会的効果のカテゴリとその般化に関わる要因：小学生に対する自由記述調査のまとめ

般化に関わる要因	効果促進要因	効果影響要因	般化場面	般化による効果	般化促進要因	般化影響要因
<p>カテゴリー</p> <p>社会性・協調性 (18) 記述例) 周りに合わせる行動が身についた</p>	<ul style="list-style-type: none"> プレー中の連携 みんなでの練習 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間との励まし合い 声の掛け合いや助け合い 相手の気持ちを考える 人間関係がうまくいくこと みんなで協力すること 	<ul style="list-style-type: none"> 友だちとの喧嘩 初対面の人との交渉 授業中のグループ活動 友人との遊び 学校行事などでの集団行動 	<ul style="list-style-type: none"> 喧嘩のうまい解決 仲間からの対立意見の減少 遊びの誘いの増加 友だちの増加 仲間割れの減少 	<ul style="list-style-type: none"> 喧嘩仲裁の成功経験 リーダーへの昇格 友だちの増加 意見をうまくまとめられたという経験 	<ul style="list-style-type: none"> 先輩のようになりたいと願うこと 練習を積み重ねること 遊びの中で喧嘩の経験
<p>忍耐力 (11) 記述例) 最後まであきらめないこと</p>	<ul style="list-style-type: none"> コーチの励ましや指導 毎日の練習 試合で負けていても最後まで声を出したこと 自分の力を信じる気持ち 他に負けたくない気持ち 	<ul style="list-style-type: none"> 監督、コーチ、仲間からの声かけ 仲間との練習 自分と戦うという気持ち 家族の支え 仲間との競い合い 	<ul style="list-style-type: none"> 何かにくじけそうなとき 勉強、宿題、テストのとき 体音の授業 	<ul style="list-style-type: none"> 最後まで取り組めるようになった あきらめなくなった 勉強に集中できるようになった 何が何でもやる態度が身についた 	<ul style="list-style-type: none"> あきらめないぞという気持ち 勉強も運動と同じように考える やり遂げたときのうれしさ 	<ul style="list-style-type: none"> 共に頑張る仲間の存在 良い結果に結びついた試合経験 仲間の行動に学ぶ 運動だけと思われたいくない気持ち 仲間の支え 周囲との喜びの共感
<p>自主性・自覚性 (10) 記述例) 自分で準備するということが身に付いた</p>	<ul style="list-style-type: none"> クラブ内の約束事 毎日の練習、試合 試合に出たい気持ち 良い結果に結びつけるという意志 周りからの厳しい指導 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間との助け合い、励まし合い 時間に対する厳しさ 作戦を立てるという経験 仲間との会話 仲間にはげたくない気持ち チームの一員としての自覚 	<ul style="list-style-type: none"> 一人での意志決定場面 日常の行動パターン 家での手伝い 勉強 仲間とのコミュニケーション場面 	<ul style="list-style-type: none"> 早めの行動の定着 授業や勉強に対する集中力の向上 主観性 (アサーション) の向上 	<ul style="list-style-type: none"> 判断や行動への賞賛 遂行達成の喜び 成功経験 極みの低減 	<ul style="list-style-type: none"> 監督や仲間と同じ行動に学ぶ 喜びを分かち合いたいという気持ち
<p>礼儀・あいさつ (7) 記述例) 挨拶ができるようになった</p>	<ul style="list-style-type: none"> コーチからの指導 先輩からの指導 練習での日常的な実践 	<ul style="list-style-type: none"> 厳しい練習 仲間との価値観の共有 仲間との共通経験 チームプレイ 	<ul style="list-style-type: none"> 他者との物の授受の場面 目上の人との応対場面 仲間との付き合い 	<ul style="list-style-type: none"> 礼節を踏まえた行動の定着 対人関係の良好な変化 	<ul style="list-style-type: none"> 礼節の大切さの理解 目上の人と接する機会の多さ 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間の行動に学ぶ 他チームの行動に学ぶ 実践に伴う快感情
<p>目標設定・計画性 (3) 記述例) 目標を立てて取り組むようになった</p>	<ul style="list-style-type: none"> 上達したいという気持ち 計画を立てて練習に取り組むという経験 毎日の練習 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間への励まし 監督やコーチの励まし ライバルの存在 	<ul style="list-style-type: none"> 他者を励ます場面 勉強 	<ul style="list-style-type: none"> アトバイスの具体的実行 予定通りの勉強達成 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間の励ましの存在 良い結果 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間の行動に学ぶ 努力が報われた経験

注：「効果のカテゴリ」の括弧内の数字は、そのカテゴリを構成する記述数である。また、効果促進要因から般化影響要因の各欄の記述は、調査対象者が効果の説明に対応して記した内容をまとめたものである。

表 4 スポーツ活動による心理社会的効果のカテゴリーとその般化に関わる要因：小学生保護者に対する自由記述調査のまとめ

般化に関わる要因	効果促進要因	効果影響要因	般化場面	般化による効果	般化促進要因	般化影響要因
カテゴリー 忍耐力・継続力 (31) 記述例) あきらめず最後まで取り組み気持ち	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の楽しい練習 やり遂げたときの喜び 周りの子どもたちの影響 指導者の力 試合中のつらい経験 	<ul style="list-style-type: none"> ゲームの楽しさの発見 監督・仲間・親の励まし 仲間や下級生の存在 仲間との競争と強い向上心 仲間の頑張る姿 クラブの進級システム ゼロからのレギュラー獲得 	<ul style="list-style-type: none"> 苦手な分野の勉強 苦手なことへの取り組み(勉強、家の手伝い) 	<ul style="list-style-type: none"> 集中力の向上 自分で考え計画する力の向上 挑戦する心の成長 納得するまで取り組み姿勢 問題解決のために様々な方法を考え工夫する力 	<ul style="list-style-type: none"> やり遂げた後の喜びの実感 嫌なことに対する気持ちの切り替えが早くなった 努力が達成につながることを感じた 自信が身についたこと 	<ul style="list-style-type: none"> 家族や周囲からの賞賛 失敗に負けない前向きさ 仲間の姿からの刺激 目標とする人物の存在 達成に向けた方法の選択能力の向上 自信が身についたこと
社会性・協調性 (22) 記述例) 様々な人の中で相手の気持ちを考えながら行動すること	<ul style="list-style-type: none"> 試合後の振り返り 自分の苦手な部分を支える仲間 仲間との話し合い チーム内の集団活動 他チームとの交流 同じ目標の仲間の存在 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間との励まし合い 仲間との意見交換 監督やコーチの助言 親や兄弟姉妹からのアドバイス 	<ul style="list-style-type: none"> 兄弟関係 普段の友だち関係 近所の友だちに対する挨拶 普通の会話の仕方 	<ul style="list-style-type: none"> 自己中心な行動の減少 小さな子どもへの面倒見の良さの向上 他者の意見を踏まえた上での主張性の向上 会話の上達 生き生きとした生活態度 	<ul style="list-style-type: none"> 様々なタイプの人との接触による自分自身の理解の深化 仲間からの信頼感の経験 仲間からの賞賛 チーム内の自分の役割の自覚 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間の自分に対する期待の自覚 仲間や先輩の姿からの刺激 チーム内の自分の役割の自覚
礼儀・あいさつ (8) 記述例) 礼儀や感謝の気持ち	<ul style="list-style-type: none"> 毎回の練習での習慣 上級生の行動からの学び 周りの仲間の模倣 集団生活 	<ul style="list-style-type: none"> 先輩や仲間との人間関係 コーチによる指導 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な大人と接する場面 	<ul style="list-style-type: none"> きちんとした挨拶やお礼 	<ul style="list-style-type: none"> 自発的に行う気持ち 身近な人や他者からの良い評価や賞賛 心が通じたときの快感 	<ul style="list-style-type: none"> ほめられることの増加 大人からの注意 ほめられることによる向上心の強化
目標設定・計画性 (8) 記述例) 目標達成のために頑張りたいかを考えようになった	<ul style="list-style-type: none"> 練習や試合経験 目標を達成できず悔しい思いをした経験 勝ちたい、向上したいという気持ちの芽生え 	<ul style="list-style-type: none"> 監督の指導 仲間との励まし合い 本人の気持ちの変化 コーチとの相性 クラブの進級システム 仲間との切磋琢磨 	<ul style="list-style-type: none"> 趣味や好きなことへの取り組み 勉強や不得意なことへの取り組み 	<ul style="list-style-type: none"> 途中であきらめることの減少 自主性や積極性の向上 自分で決めたことへの責任感 地道さ 	<ul style="list-style-type: none"> 親の言うことに耳を傾ける態度の形成 努力の大切さの気づき 練習しなければ結果が得られないことの自覚 できたときの喜び体験 	<ul style="list-style-type: none"> 目標が達成できたときの周りからの賞賛 やればできることの自覚 活躍できる場の増加 自分にできることの増加
自主性・自覚性 (2) 記述例) 休日の練習や試合日は自分で朝食を作るようになった	<ul style="list-style-type: none"> 自立性をモットーにするチームの雰囲気 自分自身を律することがスポーツでの達成につながることを悟った 	<ul style="list-style-type: none"> 指導者の声かけ 闘争心 	<ul style="list-style-type: none"> 生活習慣 	<ul style="list-style-type: none"> 規則正しい生活の心がけ 独立心の芽生え 忘れ物、遅刻の減少 	<ul style="list-style-type: none"> 時間の使い方の理解 コンディション作りの成功 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間の同じ行動 コンディション作りの成功

注：「効果のカテゴリー」の括弧内の数字は、そのカテゴリーを構成する記述数である。また、効果促進要因から般化影響要因の各欄の記述は、調査対象者が効果的効果の説明に対応して記した内容をまとめたものである。なお、効果には、他に「役割を果たす義務感」、「自信」および「慎重さ」の文言を含む記述が指摘されたが、いずれも1記述であったためカテゴリー化はしなかった。

表5 スポーツ活動による心理社会的効果のカテゴリーとその般化に関わる要因：中学生保護者に対する自由記述調査のまとめ

般化に関わる要因	効果促進要因	効果影響要因	般化場面	般化による効果	般化促進要因	般化影響要因
カテゴリー 忍耐力・根気 (29) 例)最後まであきらめずに取り組む力	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の練習の積み重ね 先輩たちの姿の影響 仲間との励まし合い 	<ul style="list-style-type: none"> 良いライバル、目標とする仲間 自分でもできるという自信と向上心 目標を持つこと 指導者のアトバイス 自分の感情のコントロール チーム全体の信頼関係 	<ul style="list-style-type: none"> 普段の生活 苦手を教料の勉強 家の手伝い 	<ul style="list-style-type: none"> 勉強への日常的な取り組み 集中力の向上 物事への自発的取り組み 強活と塾の両立 時間の有効な使い方の定着 	<ul style="list-style-type: none"> 努力が良い結果に結びついた経験 計画力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> 良い結果に対する賞賛 最後まで取り組む姿勢 自信の形成 あきらめないことの大切さの経験による認識 向上心の芽生え
社会性・協調性 (27) 例) 先輩の面倒をみたり、先輩の意見を聞くなどして、人間関係をうまく築く力	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の練習 先生や先輩による指導 先輩たちの姿を見習う 仲間と一緒の努力 日々の仲間との団体行動 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間との励まし合い 仲間との話し合い 監督やコーチの指導や助言 	<ul style="list-style-type: none"> 学級の人間関係 学級の友達と関係 近所の人との挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> 友人に対する思いやり 相手の立場を考えた行動 主張性の向上 時間を守ること 	<ul style="list-style-type: none"> 友だちの増加 集団全体に対して目配せをする力の形成 	<ul style="list-style-type: none"> 集団内の自分の立場の理解や自覚 集団がまとまることで目標達成が現実になることの経験 先生からの肯定的評価
礼儀・あいさつ (17) 例) あいさつがきちんとできるようになった	<ul style="list-style-type: none"> 毎回の練習での習慣 先輩たちの姿からの学び 他チームの多くの選手や指導者、保護者との交流 	<ul style="list-style-type: none"> 監督や先輩の指導 仲間との信頼関係 先輩との上下関係 	<ul style="list-style-type: none"> 生活全般の人間関係 近所の人や遠方の親戚などへの応対場面 電話応対 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の判断で適切に挨拶 適切な敬語の使用 時間を守る態度の形成 	<ul style="list-style-type: none"> 近所の人からの賞賛 心配りができるという仲間からの評価 	<ul style="list-style-type: none"> 先生や先輩からの賞賛 自立心の芽生え いろいろな場所での挨拶の大切さの経験
目標設定・計画性 (15) 例) 目標を決めて計画を立てて取り組む力	<ul style="list-style-type: none"> 日々の練習の積み重ね 本人の向上心 	<ul style="list-style-type: none"> 先生の指導 仲間との励まし合い 先輩の取り組み姿勢 	<ul style="list-style-type: none"> 勉強の仕方 生活のリズム 	<ul style="list-style-type: none"> 結果にこだわらぬ厳しさの確かな時間設定 勉強や生活面での効率的な時間設定 	<ul style="list-style-type: none"> 成績の向上 目標の達成経験 	<ul style="list-style-type: none"> 周囲からの取り組みに対する肯定的評価 自分でできていることの自覚
思いやり (6) 例) 仲間への思いやり	<ul style="list-style-type: none"> 同じ目標をもつ仲間との厳しい毎日の練習 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間同士の励まし合い 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活の友だち付き合い 兄弟姉妹との関わり方 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の立場への理解、配慮 自分のことは自分でしようとする態度の形成 人の気づかないことへの配慮 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間の大切さの自覚 生活に余裕が出てきたことによる視野の拡大 仲間関係の深化 	<ul style="list-style-type: none"> 先生の指導 先生、先輩、家庭での肯定的評価
努力 (6) 例) 努力すること	<ul style="list-style-type: none"> 日々の練習 試合に勝ちたい気持ち 	<ul style="list-style-type: none"> 先生や仲間の励ましと支え 実力向上に伴う自信の形成 	<ul style="list-style-type: none"> 物事への取り組み全般 	<ul style="list-style-type: none"> 成績へのこだわり あきらめない態度 	<ul style="list-style-type: none"> 努力の結果への反映 自信や責任感の芽生え 	<ul style="list-style-type: none"> 自分に適した目標の設定 周囲の支えによる自信
時間管理 (4) 例) 時間を有効に使うこと	<ul style="list-style-type: none"> 日々の練習 時間通りに取り組むことの継続 	<ul style="list-style-type: none"> 先生や先輩の声かけ 本人の性格 時間が足りないことへの経験 	<ul style="list-style-type: none"> 勉強、趣味、休みのけじめ 	<ul style="list-style-type: none"> 時間の有効利用 規則正しい生活 家事手伝いへの積極的参加 	<ul style="list-style-type: none"> やればできるという自覚 	<ul style="list-style-type: none"> 時間内の目標達成経験 友人の取り組みの影響
競争心 (4) 例) 友だちに負けないという気持ち	<ul style="list-style-type: none"> 日々の練習 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間に向けた経験 先生や先輩の励まし 	<ul style="list-style-type: none"> 勉強 	<ul style="list-style-type: none"> 集中力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> 良い成果を上げようとする態度 	<ul style="list-style-type: none"> 良い意味での仲間関係
観察力・洞察力 (3) 例) 自分の周りにも目を向けて考えられるようになった	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の練習 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間との信頼関係 先生の指導方針 	<ul style="list-style-type: none"> 普段のクラス活動 家事手伝い 	<ul style="list-style-type: none"> 困っている仲間への声かけ 自発的な家事手伝い 	<ul style="list-style-type: none"> 周りに対する思いやり 	<ul style="list-style-type: none"> 先輩や先生の声かけ 先生や親による賞賛 人との関わり方に関する自信

注：「効果のカテゴリー」の括弧内の数字は、そのカテゴリーを構成する記述数である。また、効果促進要因から般化影響要因の各欄の記述は、調査対象者が効果の説明に対応して記した内容をまとめたものである。

表6 スポーツ活動による心理社会的効果のカテゴリーとその般化に関わる要因：指導者に対する自由記述調査のまとめ

般化に関わる要因 カテゴリー	効果促進要因	効果影響要因	般化場面	般化による効果	般化促進要因	般化影響要因
社会性・協調性 (5) 例) 自分ごとだけでなく仲間や周りのことを考えられる力	<ul style="list-style-type: none"> 指導者の声かけ 毎日の練習 仲間との共通の目標での力を合わせた取り組み つらい練習の中の励まし合い 	<ul style="list-style-type: none"> 指導者の強い指導力 チーム内の規範意識 指導者の適切な助言 仲間と一線の成功体験や失敗体験 	<ul style="list-style-type: none"> 人と協力する全ての場面 学級での生活、授業、行事 家庭での生活 	<ul style="list-style-type: none"> 良い人間関係の下での心穏やかな生活 仲間同士の支え合い 他者尊重の気持ち 自発的協力 	<ul style="list-style-type: none"> 自分自身の生活の向上 一人の力の限界に対する気づき 集団活動における協力の重要性の自覚 協力により得られる達成感 	<ul style="list-style-type: none"> 指導者の日頃の声かけ 思いやり、支え合いの心の形成 結果に対する充実感
礼儀・規律・規範 (5) 例) 礼儀作法	<ul style="list-style-type: none"> 毎回の習慣 集団生活やチームワーク 	<ul style="list-style-type: none"> 競技場面や様々な場面の人間関係 指導者の声かけ 仲間と共に行動すること 	<ul style="list-style-type: none"> 普段の生活場面 	<ul style="list-style-type: none"> 時間や約束を守る態度の形成 他者に対する思いやり 他者に迷惑をかけるまいようにする態度 	<ul style="list-style-type: none"> 集団生活上の必要事項であることの自覚 仲間と一緒の達成感 仲間からの肯定的評価 	<ul style="list-style-type: none"> 相手のことを思いやる心のゆとり 感謝の気持ち 日常的な取り組み 年上の人を尊敬する心
達成行動・努力 (5) 例) 日々努力して目標に向かおうとする力	<ul style="list-style-type: none"> 日々の計画的な練習 毎日の継続的な練習 チーム目標の恒常的な意識 試合後の反省 	<ul style="list-style-type: none"> 指導者の指導方針 目標とするチームや選手の身近での存在 	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事などのクラスが団結する場面 各種テストへの取り組み 学習全般 	<ul style="list-style-type: none"> 他者の意見を共感的に受け止める態度 物事に対する意欲的態度 集団の中で自分の役割自覚 苦難を乗り越える意志 時間管理の習慣化 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の存在感の自覚 人生における必要性の自覚 目標達成に必要なことの自覚 	<ul style="list-style-type: none"> 成績向上の実体験 クラスや集団での達成感や達成感 周りからの承認や賞賛

注：「効果のカテゴリー」の括弧内の数字は、そのカテゴリーを構成する記述数である。また、効果促進要因から般化影響要因の各欄の記述は、調査対象者が効果の説明に対応して記した内容をまとめたものである。なお、効果には、他に「周囲の状況に気づく力」、「自主性」および「耐える力」の文言を含む記述が指摘されたが、いずれも1記述であったためカテゴリー化はしなかった。

IV. 考 察

1. スポーツ活動による心理社会的な効果とその促進および影響要因

本調査により、調査対象者全体から抽出されたスポーツ活動の効果に関するカテゴリーをまとめると次の通りである。「社会性・協調性」(全体の記述数: 99)、「忍耐力」(94)、「礼儀・あいさつ」(55)、「目標設定・計画性」(37)、「努力」(18)、「自主性・自発性」(17)、「思いやり」(6)、「時間管理」(5)、「主張」(4)、「聴く態度」(4)、「競争心」(4)、「観察力・洞察力」(4)、「向上心」(3)、「自省の態度」(1)。

「社会性・協調性」「忍耐力」「礼儀・あいさつ」「目標設定・計画性」は、全ての調査対象者が指摘していた。したがって、これらはスポーツ活動によって身につく心理社会的なスキルとして、子どもから大人まで共通に認識されていると考えられる。また、それ以外に関しても、調査対象者によって内容は異なるが、一般的にスポーツをすることで身につくと経験的に指摘される態度や心理社会的なスキルが指摘されているといえる。

このような中で、小学生よりも中学生において、また小学生の保護者よりも中学生の保護者において指摘されたスキルの内容が多岐に及んでいる。小学生と中学生の違いについていえば、発達的な変化としてとらえられる自己認識の広がり³⁾が、中学生自身が捉える心理社会的効果の増加に関係しているのではないかと考えられる。また、小中保護者の回答の違いは、そのような発達の変化の違いが現実に捉えられている結果であると思われる。また、記述数としては少なかったが、中学生において「聴く態度」と「主張」がカテゴリー化された。相川¹⁾は、「聴くスキル」と「主張スキル」は人間関係の基本スキルであると説明している。これらがスポーツ活動の効果として中学生自身によって指摘されたことは、子どもの心理社会的発達におけるスポーツ活動の重要性を説明する上で注目できる。

次に、スポーツ活動による心理社会的効果が身につくことを促したり、身につく際に影響を与えたりする要因としてあげられた内容は、全体を通して各効果にほぼ共通しており、「活動の継続」と「周囲(仲間・指導者・先輩・家族)との相互作用(活動に関する共通理解・支え合い・競争・指導・励ましなど)」には

ほぼ集約できると考えられる。このことからすれば、スポーツ活動の効果を高めるためには、活動(練習)そのものが継続して取り組める内容であることと、それをさらに充実させる条件として、活動に関わる人々との様々な社会的経験が豊かに準備されることが重要といえる。

2. 般化の実態

スポーツ活動における心理社会的なスキルが日常生活でも役立っているとする回答は、小学生がやや少なかった。しかし、全体的にみれば7割から8割が役立っているという認識を持っていた。したがって、小学生や中学生がスポ少や運動部の活動で身につけた心理社会的なスキルは、日常生活に般化しているとみてよいと考えられる。また、その範囲は、学校での勉強、行事への参加、友だちとの遊び方、家庭での生活の仕方、友人や教師、家族や地域の人々との付き合い方など広範囲に及んでいるといえる。

さらに、そのことがどのように役に立っているのかという点では、心理社会的なスキルが活用できるようになったことで、他者との相互作用が肯定的に変化したことや生活の改善につながったことが指摘されている。これらはいわば、子どもの「quality of life」(QOL: 生活の質)が向上したことを意味している。スポーツ活動によって身につく心理社会的なスキルの般化がもたらす2次の効果を示す記述データとして注目できる。

3. 般化の促進および影響要因

スポーツ活動場面の心理社会的なスキルが日常生活場面に般化する場合、その促進要因として指摘された内容は大きく3つにまとめられるといえる。第1は「身についたスキルの大切さの理解」、第2は「日常生活場面でのスキルの実践による成功経験」、第3が「肯定的感情の経験」である。これらは、それぞれが独立して作用するのではなく、相互に関連しながら般化を促すと考えられる。すなわち、スポーツ活動以外の生活場面でスキルを実践することにより「何らかの成果や効果」(成功経験)が得られれば、日常生活でもそれを用いることの重要性や必要性が理解されることになる。また、その成功経験には喜びや満足感、あるいは充実感などの肯定的な感情が伴っていると考え

られ、その肯定的な感情が強化子の一つとなり以後もそのスキルを用いるようになって考えられる。また、肯定的な感情と同様に般化を促す要因には、周囲からの賞賛や他者からの肯定的な評価、あるいは仲間や指導者から信頼を得ているという実感をあげることができるようである。

次に、般化に影響した要因として指摘された内容が、自分の周りにいる仲間、先輩、指導者、さらには他のチームなどの「行動をみて学んだ」というものであった。これは、モデリング²⁾に基づく般化が生じていることを示しているといえる。モデリングは、人によって影響される程度が異なるとされ、その影響因子には「モデルの特性」や「観察者の属性」²⁾があげられる。すなわち、モデルが魅力的であったり権威的であったりすれば、それは観察者にとっては成功につながる示範行動としての機能的価値あるいは情報的価値を有することになり、観察者に対して類似した行動を喚起させやすくなる²⁾と考えられている。この点、スポ少や運動部の指導者は子どもにとっては権威的なモデルであり、また、価値を有すると思われる行動を実践する仲間は魅力的なモデルであるといえる。また、同時に指導者や仲間は属性を同じくする同士であり、この点は同じ種目で活動する者としては他チームの選手も観察の対象として含まれる場合があると考えられる。したがって、指導者や仲間などの行動が、子どもの心理社会的なスキルの般化に影響を及ぼすことは十分に考えられる。

以上、般化の促進および影響要因を併せて考えると、スポーツ活動によって身に付いた心理社会的なスキルの般化においては、次の5点が重要であると考えられる。第1はスポーツと異なる場面でもそのスキルが実践されること（実地の体験）、第2はその実践後に良い結果が得られること（達成・成功経験）、第3はその結果に対して周囲が肯定的な評価を行いスキルを用いたことに対する成功感や充実感などの快感情が体験されること、第4は周囲（仲間、指導者、親）がそのスキル実践の良き示範者となること、そして第5が、これらの過程を経る中で、心理社会的なスキルの価値が子どもたち自身において理解されることである。これらの要因は、スポーツ活動によって身に付く心理社会的なスキルを、いわゆる「生きる力」⁶⁾として子どもたちに定着させ発展させるためのプログラムなどを考える際には重要な意味を持つ条件になると考えられる。

4. 本研究の限界と今後の検討課題

本研究の調査対象者は、スポ少に所属する小学校2校の5、6年生と運動部に所属する中学校1校の1、2年生、およびその保護者と運動部顧問などであった。収集された記述データからは、スポーツ活動の効果や般化についての有用な知見が得られたと考えられる。しかし、研究目的が実態把握であった点からすると、調査対象者が限定的であった。子どものスポーツ活動環境は、その地域の教育行政¹⁷⁾や、親の関わり方などでも異なる¹¹⁾と考えられる。したがって、スポーツ活動の効果とその般化の実態をより正確に把握するためには、これらの環境的要因も考慮に入れた検討が必要になると思われる。

また、以上の視点に立てば、地域のスポーツプログラムとして行われるスポ少と学校教育の一環として行われる運動部活動の違いについても考慮し、それぞれの活動の効果と般化の特徴や違いについて分析される必要がある。

次に、本研究で実施された調査は自由記述方式の質問紙調査であった。このような調査では、調査対象者の文章表現力などが回答に影響する場合がある。特に、スポーツ活動の効果の般化に関する記述では深い洞察が必要であったと思われる。また、効果および般化の促進並びに影響要因については、その回答内容からは調査対象者が各要因を十分に区別できていないことが示唆された。今後、般化の過程やそれに関わる要因を正確に把握するためには、半構造化面接によるインタビュー調査などの実施も必要と考えられる。

最後に、本研究において指摘された般化の促進要因や影響要因が、実際にそのような機能を持つのかどうか、また、それが多くの子どもの共通の要因といえるのかが検証される必要がある。今後は本研究により得られた知見を整理し、スポーツ活動によって身に付いた心理社会的なスキルの般化モデルを考案することによって、実践的かつ実証的な知見を提出することが課題といえる。

V. まとめ

本研究の目的は、スポ少や運動部でスポーツに取り組む子どもたちの、スポーツ活動で身に付いた心理社会的なスキルの日常生活に対する般化について、その

実態を明らかにすることであった。スポ少や運動部に所属する小中学生とその保護者並びに指導者の合計383名に対して、自由記述調査が実施された。収集された記述データは分類・整理され、スポーツ活動によって身に付く心理社会的なスキルにはどのようなものがあるのか、それはどのようにして身につくのか、日常生活には般化しているのか、それはどのように役立っているのか、般化は何によって促進され、またどのようなことの影響を受けているのかなどが検討された。

分析の結果、スポーツ活動を通じては、他者との関係性を良好にするためのスキルや苦しいことにも我慢強く取り組むためのスキル、また問題や課題を計画的に遂行するためのスキルなどが身につくと考えられており、これらは子ども、保護者、指導者間ではほぼ共通に認識されていることが示唆された。また、これらのスキルが身につくことには、スポーツ活動中の周囲の人々との支え合いや競争などの様々な社会的経験と、それを含む継続的な活動が関連していると考えられた。さらに、身についた心理社会的なスキルは日常生活でも役立っているとする考えが全体のほぼ7割以上を占め、また、そのことによって子どもたちのQOLが向上するという2次的な効果が生まれていることも示唆された。そして、このような般化を促したり、般化に影響を与えたりする要因としては、①日常生活場面での実践、②実践による成功経験、③実践後の快感情、④良き示範者の存在、および⑤スキルの価値の理解が考えられた。最後に、本研究に関わる今後の検討課題が示された。

注

- (1) 本研究では、スポーツ活動場面で心理社会的なスキルが身に付く場合や、それが日常生活のスキルとして用いられるようになる場合に、そのことに関係した経験や体験(例：厳しい練習、努力が良い結果に結びついた)を促進要因、また、内外の要因としてその経験や体験に関連していた事柄(例：ベストタイムを更新したいという強い思い、良い結果に対する賞賛)を影響要因としてとらえることにした。
- (2) 小中学生の教示文は以下の通りである。①スポーツ活動の効果：スポーツ活動を行って来て、身に付いたこと、学んだことは何ですか(技術、体力、健康は含めない)。②効果促進要因：それはどのように身に付きましたか。③効果影響要因：それにはどのようなことが関係していましたか。④般化の有無：それはふだんの生活で役に立っていますか。

⑤般化場面：役立っているのはふだんのどのような場面ですか。⑥般化効果：具体的にどのように役立っているのかを教えてください。⑦般化促進要因：なぜ役立つようになりましたか。⑧般化影響要因：それにはどのようなことが関係していましたか。

- (3) 各要因別に記述文に含まれる内容を1件1ラベルとして抽出した場合のラベル延べ数。ただし、1記述中に複数の内容が含まれる場合は、それぞれを1ラベルとして計数した。

謝辞

調査を実施するにあたり、ご協力を頂いた方々に心より感謝申し上げます。また、本研究は、科学研究費補助金・基盤研究(B)(No.22300207、研究代表者：西田 保)の助成を受けて行われました。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 相川充(2000)人づきあいの技術, p.22-23, サイエンス社, 東京。
- 2) A・バンデュラ：原野広太郎監訳(1979)社会的学習理論, p.98-104, 金子書房, 東京。
- 3) 柏木恵子(1983)子どもの「自己」の発達, p.45-48, 東京大学出版会, 東京。
- 4) 川喜田二郎(1967)発想法, Pp.220, 中央公論社, 東京。
- 5) 文部科学省(2000)スポーツ振興基本計画, http://www.mext.go.jp/a_menu/sport/plan/06031014/001.htm, (参照日2011年6月18日)。
- 6) 文部科学省(2008)生きる力, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/20080328/01-16.pdf, (参照日2011年6月14日)。
- 7) 文部科学省(2010)平成21年度 文部科学白書, http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad200901/detail/1296914.htm, (参照日2011年6月14日)。
- 8) 中西純司, 相部保美, 南条佳奈ほか(2007)子どもの運動・スポーツ活動と「社会力」との関連性に関する実証的検討, 福岡教育大学紀要56:133-146。
- 9) 中島義明, 安藤清志, 子安増生ほか(1999)般化：心理学辞典, p.702, 有斐閣, 東京。
- 10) 永井洋一(2004)スポーツは「良い子」をそだてるか, p.160-171, 日本放送出版協会, 東京。
- 11) 永井洋一(2007)少年スポーツ ダメな指導者 バカな親, Pp.197, 合同出版, 東京。
- 12) 作野史朗(1971)社会性発達に関する体育管理学的研究, 日本体育学会学会号22:512。
- 13) 作野史朗(1972)社会的発達に関する体育管理学的研究(その2), 日本体育学会学会号23:479。
- 14) 島本好平, 石井源信(2007)体育の授業におけるスポーツ経験が大学生のライフスキルに与える影響, スポーツ心理学研究34:1-11。

- 15) 上野耕平, 中込四郎 (1998) 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究, 体育学研究43 : 33-42.
- 16) 内海和雄 (1998) 部活動改革, p.36-37, 不昧堂出版, 東京.
- 17) 内海和雄 (1998) 部活動改革, p.108-128, 不昧堂出版, 東京.
- 18) 米川直樹, 鶴原清志, 藤田匡肖 (1994) 児童のスポーツ活動が心理的側面に及ぼす影響について, 三重大学教育学部研究紀要45 : 69-86.
- 19) 財団法人日本体育協会日本スポーツ少年団 (2011) ガイドブックスポーツ少年団とは, <http://www.japan-sports.or.jp/club/>, (参照日2011年6月18日).

(平成24年9月12日受付)
(平成24年12月19日受理)